

# 西真寺 寺報

平成三十年 冬号

■脳死の問題と仏教④

## 住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて金仏相続に御積勵のことと、お喜び申し上げます。

お盆の棚経の際は、大変お世話になり、有難うございました。私にとつて三年目の村上の夏は、厳しい暑さの中ではありましたが、いつもながらに、各ご門徒様に温かく向かい入れて頂き、心身共にあまり疲れを感じることなく勤めさせて頂きました。

さて、西真寺の今後の在り方を検討するうえで、「開かれた寺づくり」を目標に、これまで「寺ヨガ」や「編み阿弥ダーナ」、「おて落語」などを取り組んでまいりました。この度、竹灯籠祭りに参加することに成りました事をご報告いたします。

内容については、ジャズと琴の演奏を十月の六日と七日の夕方から本堂にて行います。ご門徒の皆様におかれましては、ご家族ご友人を連れて是非おいで頂きたいと思います。

竹灯籠の明かりが、地域に灯す（貢献する）明かりとして、点としてではなく、線で共同体としてのつながりを持つ光の輪となつて、将来の御門徒の方々を照らし続けてくれると信じております。足元のおほかない不安な毎日ですが、未来に明かりを灯すはたらきとなってくれることを願うばかりです。

合掌 般直徳

身体性と個性化の過程を理解しようとしない一方的な人間の死の基準や判定には、人間が死んで往くまでに成長する自己実現の過程に断絶を与え、人格を無視し、人間を機械化する現代合理主義の「渴愛」（独りよがりによる驕り）つまり「支配欲」が肥大化しているのです。人間にとつて本来備わる個性化のはたらきのみならず、「身体の精神性」を阻み、臓器移植を正当化する為の故意に操作された死の定義の根底にあるのがデカルトの心身二元論ではないでしょうか。

個性化を成立させる「全体のはたらき」は、親鸞の晩年の境地である「自然法爾」に相当すると思います。

「自然法爾」とは、「オノズカラシカラシム」を意味し、本来的にそうであること、人工的な作為が加えられていない、あるがまま、そのままの自己のあり様、つまり「自己同一性」を示します。人間という個体の生命は、万物と同様に本来は平等であります。それ以上分離出来ない単位として尊重され、自己同一性を維持・成長させていく潜在力を持っています。この自己を成立させる本來のいのちからの願い（本願）としてはたらき続けるのです。

自然と言うは、自はおのずからという。行者のはからいにあらず、しからしむということばなり。然といふはしからしむといふことば、行者はからいにあらず、如來のちかいにてあるがゆえに。法爾といふは、この如來の御ちかいなるがゆえに、しかしむを法爾といふ。法爾はおんちかい（本願）なりけるゆえに、すべて行者はからいのなきをもつて、この法のとくのゆえにしからしむといふなり。すべて、人のはじめてはからわざるなり。このゆえに、他力には義なきを義とするべしと

なり。(中略) みだ仏は、自然のようをしらせんりょう(料)なり。(中略) これは仏智の不思議にあるなり。(『末燈鈔』)

このおのずから湧き起る「はたらき」こそが、本来の生き方を願

う「他力」を示し、「限りないのち」(無量寿)からの願い、すなわち阿弥陀如来の「本願」そのものなのです。仏教の「諦観」とは、真実を明らかに観ることを指し、万物は、絶えず変化しながら留まる事がなく流転している道理に気づき、自己として受け入れることであります。そして、行者はからいによる「自分だけのいのち」から「限りないのち」に目覚めていくことで、死と生を併有して「仏智」を生きることができます。我想います。

脳死認定によつて、子どもに臓器を与える法整備は成立したものの、肝心な他人の死を悲しみ共鳴する「生き方」を示すこと、が出来ない「独りよがりによる驕り」(行者はからい)を生産する未成熟な社会環境においては、この法案成立によつて誘拐による臓器売買や、社会的に立場の弱い人々への臓器提供の同意書が増えることが予想されています。

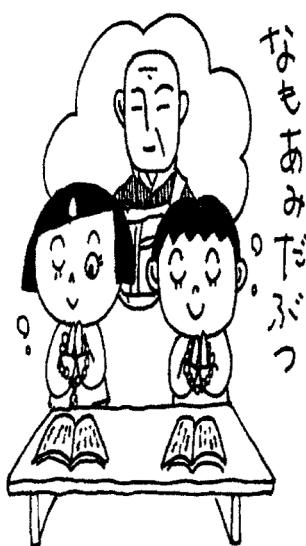
また、脳死状態にいる人達のいのちの尊厳が危ぶまれ、「役に立たないなら、他人に提供すべき」とする人間のいのちに対する「善悪のものさし」を持つ風潮や「優生主義」が生まれかねません。本来、死は一時点の出来事でなく、時間の幅を残す静かな過程のはずですが、その貴重な別れの時間さえも脳死判定に奪われ、「いのちを物として認めなさい」と迫られ、認めれば人間のいのちは即、国や医学界の資源に転換してしまうのです。

脳死を認める医学の「はからい」や「善悪のものさし」などの人間観は、結果的に人間の根本的な存在意義を歪め、不透明で密

室に覆われた「見えない死」を正当化し、「いのちのモノ化」と「いのちの私有化」という「いのちの差別化」を推進していくことに成りかねません。優生主義は、戦前の反ユダヤ主義や戦後の「優生保護法」が示す通りです。

一方の仏教の示す人間観は、死の過程を受け入れるが故に、「賜つたいのち」がもたらす「個体化の過程」あるいは「自己実現」、つまり自然法爾のはたらきを尊重し、生きる意味を与えてくれます。そして人間成就を促し、「いのちの絶対的平等」や「つながり合ういのち」を「本来の自己のあり様」とする視点を持つ人間観であります。以上の人間観を踏まえて再度、脳死の問題を見つめ直して頂ければ幸いです。

合掌 本荘 直広



■西真寺 行事のご案内

竹灯篭祭り

十月六日(土)七日(日)  
四時半～八時半まで  
十月十四日(日曜日)

三十一年十月末予定

報恩講

京都本山参詣旅行